

"A True Book, with Some Stretchers"
 — *Huckleberry Finn* 考 —

星野 勝利

"Why, there ain't no end to your airs—they
 say you are rich. Hey? — how's that?"

"They *lie* — that's how."

You can't pray a *lie* — I found that out.

— *Adventures of Huckleberry Finn*

Adventures of Huckleberry Finn (1885, 以下 *Huckleberry Finn*) の冒頭で、語り手の少年 Huck は、*Adventures of Tom Sawyer* (1876, 以下 *Tom Sawyer*) に触れる。Huck によれば、*Tom Sawyer* という本は、「マーク・トウェインさん (Mr. Mark Twain)」が書いた本で、だいたい「ほんとのこと (truth)」が書かれているが、「尾ひれをつけたところ (stretchers)」も少しあるという。しかしこの「尾ひれ」に関して、Huck は、著者である "Mr. Mark Twain" を弁護する。理由は、「うそをついたことのない人などみたことない (I never seen anybody but lied one time or another)」(1章) からである。¹

Huckleberry Finn は、Huck が語る物語である。ところが、語られる世界は、「うそ (lie)」の頻出する世界である。ランプをこすれば鬼が呼び出せるという Tom の話は、Huck に言わせれば、「よくある Tom のうそ (one of Tom Sawyer's lies)」(3章) である。語り手である Huck 自身も「うそ」の世界と無縁ではない。筏に戻った Huck が、眠りから覚めた Jim に対して取った行動は、Jim に言わせれば、「うそでジムをからかう (make a fool uv ole Jim wid a lie)」行為であった。Huck が Wilks 家の三女 Joanna に対して苦しまぎれにするイギリスについての話は、「その話はみんなうそじゃないんでしょうね (Honest injun, now, hain't you been telling me a lot of lies?)」(26章) という問いを誘発するものである。

物語の中に「うそ」が頻出し、語り手もまたその「うそ」と無縁な存在ではないとしたら、語られる物語そのものは、どのようなものとなるのである

うか。また、そこに見られる「うそ」には、どのような意味が内包されるのであろうか。

I

神話の世界に「トリックスター (Trickster)」とよばれる存在がある。世界各地の口承伝承に特徴的に見られるもので、超自然的な力を發揮して、しばしば人々を欺き、それによって一種の文化的ヒーロー (またはアンチヒーロー) となるものである。日本の神道伝承に見られる「きつね」もその一例である。「きつね」に対して農民が供えものをするのは、この動物が日本の文化の中でそのような役割を持つ存在であることを示唆するものである。²

Trickster の特徴の一つは、巧妙な「欺き」(deception) である。「欺く」ことによって、Trickster はヒーロー的 (あるいはアンチヒーロー的) 存在となる。「欺き」はもちろん、「うそ」の世界と無関係ではない。この意味で Trickster の流れをくむものは、文学の世界に少なくない。オデュッセウス (Odysseus) の漂流冒険譚も、中世の仮面劇 (mask) の世界も、悪漢が現実離れした冒険を次々と重ねていくピカレスク・ノベル (picaresque novel) の世界も、すべてこの流れに属するものと見ることができる。³ アメリカ文学にもこれに該当するものが見あたる。Herman Melville の *The Confidence-Man: His Masquerade* (1857) は、他ならない「詐欺師(confidence-man)」が主役であるという点で、その格好の例である。「うそ」の世界が頻出する *Huckleberry Finn* も、やはりその一つということになる。⁴

Huckleberry Finn の「うそ」の世界は多様である。物語の冒頭部分で Huck は Tom の仲間のひとりとなる。その Tom は、「ぶた (hogs)」を「金塊 (ingots)」とよび、「かぶら (turnips)」を「宝石 (juley)」(3章) と呼ぶ。一種の「うそ」である。しかしこれは、「おらたちは海賊ごっこをやった (we played robbery)」(同前) からである。Tom の「うそ」は文字通り、「遊び (play)」の類のものである。物語の最後の場面で逃亡奴隷 Jim を自由にするために Tom の提案で行われるさまざまな「うそ」、すなわち、小屋の偽装、家庭用品の盗み、匿名の手紙、使用人への欺き等 (33-42章) も、やはりこの部類のものである。いずれも「あそび」的なものであり、基本的に害のない、無邪気なものである。

一方、物語の途中で現れる「王様 (the King)」と「公爵 (the Duke)」による「うそ」は、これとは対照的に、いわゆる「詐欺」としてのそれ、「ペテン」

としてのそれである。「薬売り」「役者」「催眠術師」「骨相見」「音楽教師」「講演者」「医者」「占い師」「牧師」(19章)など、得意なものとして二人が名乗るさまざまな職業は、つまりは他人を欺いて金銭を手に入れるためのものである。Wilks 家の知人になりすまして展開されるさまざまな「うそ」の行為(24-9章)も、この延長線上のものである。

これらの場合、行為の主体者は、Tom であり、King であり、Duke である。しかしこれらの人物は、Huck が語る物語の中では終始一貫して姿を現す存在ではない。Tom が現れるのは物語の冒頭と末尾部分であり、一方 King と Duke は、途中で現れて途中で消えていく存在である。すなわちこれらの人物は、作中人物としてみた場合、脇役的存在でしかない。中心となり、主役となるのは、むしろ、一人称の語り手 Huck であり、その Huck と生活をともにする逃亡奴隷 Jim である。

しかし二人の中で、「うそ」の行為により深く関わるのは、語り手である少年 Huck である。もちろん Jim も「うそ」と無関係な存在であるわけではない。Miss Watson のもとから逃亡した Jim も、見つからないように逃げ出した(8章)という点で「うそ」の行為と無関係であったとは思われない。しばしば自分の話に「飾りを付ける (paint)」(15章)という点でも、「うそ」に関わる存在である。しかし、このような Jim の「うそ」は、Huck のそれに比べれば、量的に見ても、ものの数ではない。Huck の「うそ」は、話の冒頭から末尾まで、ほぼ一貫して、継続的、反復的に見られるものであり、その主なものを挙げれば、次のようになる。

- 1 Miss Watson に対し、心の中の思いを言わないで応対する (1章)
- 2 「誰だ」という Jim に対し、誰もいないふりをして逃げる (2章)
- 3 金持ちだろうと問う父に対し、それはうそだと答える (5章)
- 4 酔い覚めの父に自分の行為についてうそをつく (7章)
- 5 「誰も自分の後を追わない方法」で逃げる (7章)
- 6 Sarah Williams に女装し、見破られると George Peters と名乗る (11章)
- 7 金持ち Miss Hooker の知人と名乗って難破船へ人を送る (13章)
- 8 眠りから覚めたジムに対しその眠りがなかったかのように応待する (15章)
- 9 天然痘にかかった家族がいると逃亡奴隷探しの白人に話す (16章)
- 10 George Jackson の仮名で Shepherdson 家に入る (17章)
- 11 King と Duke に Jim との旅の目的について作り話で説明する (20章)

- 12 Wilks 家の娘 Joanna (Harelip) にイギリスについての作り話をする (26 章)
- 13 金が消えたことについて王と公爵に作り話で答える (27 章)
- 14 Joanna におねいさんの不在の理由を作り話で説明する (28 章)
- 15 医者と弁護士に対し身元について必死にうそで答える (29 章)
- 16 Phelps 農場への途中で出会った少年にうそをつく (31 章)
- 17 再度出会ってしまった公爵に作り話でいいわけをする (31 章)
- 18 Tom に間違えられてそのまま Tom になります (32 章)
- 19 地下室へ行った理由について Aunt Sally にうそをつく (40 章)
- 20 Tom のけがについて医者を作り話で説明する (41 章)

このリストは、Huck の「うそ」の遍在性を雄弁に語ってくれる。しかしこのような無数のうそも、その内質は、King や Duke のそれとは基本的に異なるものである。King と Duke のそれは、社会的な悪としてのそれ、犯罪的なものとしてのそれである。「ごろつき (rapscallion)」(23 章)「悪漢 (fraud)」(25 章)「ごくつぶし (dead-beat)」(28 章)「やくざもの (gang)」(同前)「うそつき (liar)」(29 章)という二人に対する形容辞は、二人の「うそ」の反社会的性格を示すものである。

しかし、Huck の「うそ」はこれとは異なる。「うそ」の行為の模範となるのは、多くの場合 Tom である。自分が殺されたことを装う時 (7 章) も、Mary Jane の逃亡を助けるための「うそ」に成功した時 (28 章) も、思い浮かべるのは Tom のことである。Tom ならばどうするか、Tom とくらべて自分の「うそ」のでき具合はどうか、といった思いである。このことは Huck の「うそ」が基本的に Tom のそれに近いこと示唆する。

Tom の「うそ」は、つまりは「あそび」としてのそれである。ところが、Jim を怒らせて自分の行為を悔いた際、Huck は、自分の行為を「いたずら (trick)」として語っている。自分の行為を批判され、それ以来 Jim に対しては「もういたずらはしなかった (I didn't do him no more mean tricks)」(15 章)と語っている。この Huck の「いたずら」を、先に見たように、Jim は「うそ (lie)」としてとらえている。このことは、Tom の「あそび (play)」に近い Huck の「うそ (lie)」が、つまりは「いたずら (trick)」としてのものでもあることを示唆する。かくして Huck は Trickster としての役割も発揮することになる。

ただし、*Huckleberry Finn* の「うそ」の世界は、作品全体を通してみれば、さらに多様な広がりを持つ。Huck にタバコを禁止しながら自分でそれをたしなむ Widow Douglas の行為 (1 章) や、効き目のない祈りを毎日強いる Miss Watson (3 章) の行為には、Huck の目で見れば、どこかに「うそ」がある。貧しいものへの施しが 100 倍になって戻ることを説く牧師の話 (8 章) や、日曜日には「兄弟愛」の説教を聞きながら平日には Shepherdson 家に対して復讐劇を繰り返す Grangerford 家の人々 (18 章) にも、やはり一種の「うそ」がある。さらにこれは、たとえば「さくら」の演技によって観客を「欺く (fool)」(22 章) サーカスにさえも、見られないわけではない。

社会の落伍者である Huck の父 (Pap Huck) も、この種の「うそ」を指摘する存在である。「これが政府ってもんか! (Call this a govment!)」(6 章) と社会に毒づくこの落伍者に言わせれば、親の扶養能力の欠如を理由にして子を他人の養子として認める法律も、混血の黒人が大学教授となって選挙権を持つことも、あってはならない「うそ」である。侮辱をくわえた男 Boggs を射殺した後で、民衆を前に演説する Colonel Sherburn も、人間の心に巢食う一種の「うそ」を指摘する。Sherburn に言わせれば、自分をリンチにかけようとする群衆の「勇氣 (courage)」などは、「うそ」くさいものでしかない。「内から発したもの (born in)」ではなく「よそからのかりもの (borrowed from)」(22 章) なのである。おびえて逃げ出す群衆の行動は、これを事実として証明することになる。

少年 Huck が生き、語り手 Huck が語る世界は、このような「うそ」の世界である。Huck の行動自体にも、身のまわりの世界にも、いたるところに「うそ」が遍満する。その世界は、場所的には、西部開拓の気運の中でにぎわい始めていたミシシッピー川を中核とするアメリカ中西部の世界、時代的には、南北戦争を少し後に控えた複雑な変化の時代、すなわち奴隷制が社会的に大きな問題となっていた時代である。⁵

II

Melville の *Moby-Dick* (1851) は鯨に関わる物語である。船長の Ahab は、自分の足を喰いちぎって逃げた巨大な白い抹香鯨を追う。Ahab 船長にとってこの鯨は、一個の哺乳動物としての鯨よりも、むしろ一つの「仮面 (mask)」として存在する。一等航海士 Starbuck に対し、Ahab はこのことを次のように説明する。

All visible objects, man, are paste board *masks*. But in each event— in the living act, the undoubted deed — there, some unknown but still reasoning thing puts forth the mouldings of its features from behind the unreasoning *mask*. If man will strike, strike through the *mask*!

(Chap.36, emphasis added)

鯨に対するこのような視座は、物語の語り手である Ishmael のものと重なり合う。この鯨の特徴的な色である「白」について思いめぐらす Ishmael は、その結果として、「自然 (Nature)」のなかに「欺瞞 (deceits)」を見る。夜空に輝く白い銀河、日没の太陽、蝶の羽など、この世に見られる美しいものはすべて、人間の目を欺く「巧妙な欺瞞 (subtile deceits)」(42章) であるとするのである。この見方は Ahab 船長の鯨に対する視点と通底する。鯨が「仮面」であるように、「自然」の世界もまた「欺瞞」なのである。すなわち Ahab 船長や Ishmael にとって、この宇宙や世界は、本体を隠蔽した一個の「仮面」として、「欺瞞」として存在する。すなわち「うそ」の世界である。

作品 *Huckleberry Finn* も、「仮面」の世界、「欺瞞」の世界である。ただし、この「仮面」や「欺瞞」を眺める視線そのものは、Ahab 船長や Ishmael のそれとは異なる。たとえば筏の上の Huck と Jim は、夜空の星を眺めながら、「星が造られたものか、自然にできたものか (whether they was made or only just happened)」(19章) について議論する。このテーマは、場合によっては、造物主の問題をめぐる哲学的、神学的、科学的議論へと展開する可能性を持つものである。しかし二人の議論は、Ahab 船長や Ishmael の場合のように、形而上的展開を見せるものではない。Huck はこれが「自然にできた」という立場をとる。理由は、「あんなにたくさん作るなんて無理だとおもった」からである。一方 Jim は「月が作ったかもしれない」という立場をとる。Huck はこれに反論することができない。理由は、「以前にカエルが星の数くらい卵を生んだのをみたことがある」からである。二人の議論は、Ahab 船長や Ishmael のそれとは異なるレヴェルのものである。無知なものどうしの、無邪気な議論である。

Melville には、「仮面」をテーマとするもう一つの作品がある。*The Confidence-Man: His Masquerade* (以下 *The Confidence-Man*) である。この作品は、*Huckleberry Finn* と同様、ミシシッピ川を舞台とする。ミシシッピ川を下る蒸気船上にある日現れた一人の詐欺師が、船上の乗客から次々と金

銭を巻き上げていくという物語である。文字通り一人の「詐欺師」の行状を語る物語である。

The Confidence-Man と *Huckleberry Finn* には、いくつかの共通点がある。ミシシッピー川が舞台となること、「詐欺」が話題になること、時代背景が類似することなどである。ただしこの共通点は、相違点も抱えている。たとえば、前者では、ミシシッピー川を下る船が舞台となるのに対し、後者では陸の世界も舞台となる。また前者では、奴隷のことが重大な問題となるのに対し、後者ではむしろインディアンのことが問題となることなどである。しかし二つの作品でとりわけ注目したいのは、「詐欺」に関わる点である。

The Confidence-Man の場合、一人の詐欺師がある日（4月1日）蒸気船上に姿を現す。巧みな弁舌を武器として、次々と乗客を欺き、最後は、「仮面劇はさらに続くであろう（*Something further may follow of this Masquerade*）」

（45章）という語り手のことばに送られて、闇の中に姿を消す。*Huckleberry Finn* にも詐欺師が現れる。King と Duke である。Melville の詐欺師と同様、この二人も、得意の演技と巧みな弁舌で人々を欺き、金銭を巻き上げる。この意味で両者は共通する。ただし、前者は、物語の主演であるが、後者の二人は、主演と言うべき存在ではない。物語の途中で姿を消す脇役的存在である。それも、群衆のリンチにかかった惨めな姿で物語の舞台から姿を消す存在である。最後まで正体を明かすことなく、詐欺行為の更なる継続を示唆しつつ姿を消す前者とは、大きな違いである。

しかし *Huckleberry Finn* の場合、「詐欺」に関わるのは、実は King と Duke だけではない。「うそ」と「詐欺」を基本的に同質のものと見るならば、「詐欺師」の数は一気に拡大する。「うそ」を重ねる Huck はもちろんのこと、Tom も、Jim も、Widow Douglas も、Miss Watson も、いずれもこれと無縁ではないし、暴徒と化す群衆の心も、法律や政治といった社会構造に関わるものも、やはりこれとどこかで関わるものである。だとすると、Huck の生きる世界は、いたるところで「詐欺」が見られる世界、「詐欺」によって塗りつぶされた世界となる。

その世界を生きる少年 Huck の生き様は、Melville の詐欺師のそれに類似する。Melville の詐欺師は、物語の冒頭から末尾まで、変装と詐欺行為を重ねつつ闇の中に姿を消す。少年 Huck もまた「変装」と「うそ」の行為を重ねる。女装し、仮名を名乗り、生い立ちを偽りながら、物語の冒頭から末尾まで、一貫して「うそ」の行為を反復する。しかも、Melville の詐欺師が「仮面劇はさらに続くであろう」という語り手のことばとともに舞台から消えて

いくのと同じように、Huck もまた、「インディアン地区 (the territory)」へ「飛び出す (light out)」(終章)。ミシシッピー川よりもさらに西に広がるこの新たな世界が、更なる「うそ」の世界ではないという保証は、どこにもない。それどころか、その可能性はむしろ大である。Tom によれば、インディアン地区には「ごっつい冒険 (howling adventures)」(同前) が待ち受けているはずである。

ただし、*The Confidence-Man* と *Huckleberry Finn* には、「詐欺」の内質について、根本的な相違点がある。これは、*Moby-Dick* と *Huckleberry Finn* にみられたものと同種のものである。

The Confidence-Man の場合、詐欺行為の主体者である稀代の詐欺師 (8 回変装をする *Cosmopolitan* なる人物) の詐欺の手法は、きわめて巧妙である。変装が巧妙であるだけでなく、弁舌もまた巧みである。弁舌の内容は、相手を信頼させるにたる一見真摯なものであり、その論理も、破綻を来すことなく相手を説得できるようなものである。作品冒頭で聾啞者として姿を見せるこの詐欺師は、手持ちのスレート板に、「愛は恨みをいだかない (Charity thinketh no evil)」(1 章) ということばを記している。詐欺師から乗客に対して送られる最初のメッセージが、他ならない聖書のことば(「コリント前書」13 章)であることは、この詐欺師の戦略の本質を示唆するものである。日常的世界、すなわちキリスト教的な世界で、十分に説得力をもつもの、それを巧妙に活用すること、それがこの詐欺師の基本的戦略である。

他方、*Huckleberry Finn* に見られる詐欺の行為は、内容も、論理も、いずれも破綻したものが多く、ランプをこすれば鬼が呼び出せるという Tom のうそ (3 章) は論外としても、Huck のそれにも、論理の破綻を示すものが多い。「みつくち (Harelip)」の娘 Joanna とのあいだで展開されるイギリスの王様との出会いの話 (26 章) など、その最たるものである。破綻した論理が破綻しないのは、一般的には誰でも理解できるはずの破綻を、応対する相手が理解できないレヴェルにあるからでしかない。

King と Duke の詐欺行為にも同じことが言える。ロンドンから来た悲劇の名優になりすまして芝居を張るため、Duke の指導のもとで King が必死に覚える Hamlet の科白は、次のようなものである。Hamlet と Macbeth の著名な科白のごったまぜでしかないこの科白は、聖書のことばを正確に掲げる Melville の詐欺師に引き替え、詐欺師としての二人が、きわめて喜劇的な存在であることを際立たせる。

To be or not to be; that is the bare bodkin
 That makes calamity of so long life;
 For who would fardels bear, till Birnam Wood do come to Dunsinane,

 Ope not thy ponderous and marble jaws,
 But get thee to a nunnery — go!

(Chap. 21)

喜劇的であるのは、「みつうち」に対する Huck の応対ぶりや、二人の詐欺師の科白の中身だけではない。同種のことが繰り返し反復的に語られる *Huckleberry Finn* という作品自体が、喜劇性にあふれたものである。この喜劇性は、真摯な内容がきわめて滑稽に表現されているという点で、ユーモア (humor) を生み出すものであり、時にはむしろバーレスク (burlesque) 的なドタバタ性を晒し出すものでもある。「仮面」や「詐欺」の世界が同じように提示されはするものの、提示されるその内質には、このような大きな差異が認められるのである。

III

Huckleberry Finn の冒頭に「警告 (Notice)」のことがばがある。著者からの命令で「兵器部長 (Chief of Ordnance)」が書いたとされているものである。この言葉は、読者に対して、本の「主題 (motive)」や「教訓 (moral)」や「筋書き (plot)」への関心を捨てることを半ば脅迫的に求めるものである。

Persons attempting to find a *motive* in this narrative will be prosecuted; persons attempting to find a *moral* in it will be banished; persons attempting to find a *plot* in it will be shot. (emphasis added)

世界を代表する古典的な作品として、*Huckleberry Finn* にはさまざまな読みが試みられている。しかしその読みは、この警告のことがばを無視した嫌いのあるものが少なくない。もちろん警告のことがばは、単なる一つのユーモアとして解することができるものである。しかし現実には、作品 *Huckleberry Finn* に対するこれまでの読者の関心は、多くの場合、逃亡奴隷をめぐる奴隷制の問題、それに関わる主人公の良心の問題、そして末尾部分の筋書きの適

否の問題などであった。これらはいずれも、警告のこととは相反するものである。⁶

もちろんこのような関心が、読者の関心のすべてであるわけではない。たとえば Ernest Hemingway のよく知られたことば「アメリカの現代文学はすべて *Huckleberry Finn* から始まる (all modern American literature comes from one book by Mark Twain called *Huckleberry Finn*)」は、主としてこの作品の文体やことばに関わるものである。⁷ しかしこの作品が、第二次世界大戦後、規範的な学校教材となる上で大きな役割をはたしたとされる Lionel Trilling の場合、⁸ *Huckleberry Finn* への関心は、主としてその「主題」や「教訓」や「筋書き」にあったと言える。テキスト版に記された Trilling の評は、作品の「形式」や「文体」についても述べている。しかし、主として語られるのは、「聖者の家族 (community of saints)」としての Huck と Jim の関係、「川の神 (river-god)」としてのミシシッピー川、そこに見られる「道徳的意味 (moral implication)」、Tom による巻末の Jim 救出劇の「形式的妥当性 (formal aptness)」などである。⁹

上に見たように、*Huckleberry Finn* は、「うそ」の遍満する世界である。しかしこの「うそ」の世界は、作者が読者に対して関心を向けないように求めた「主題」や「教訓」や「筋書き」の問題と、きわめて深い関わりを持つものである。

作者の意図を無視して、関心をあえて「主題」や「教訓」に向けるとき、特に注目される部分 (章) が作中に二つある。16 章と 31 章である。いずれも逃亡奴隷 Jim について思いめぐらす Huck の心の状態が語られる部分である。すなわち、自由州を近くにして逃亡奴隷 Jim を「密告しようと思いつめる (all in a sweat to tell on him)」(16 章) 部分と、King によって売られた Jim を、所有者である Miss Watson に知らせるべきかどうか迷い、「よし、こうなったら地獄へ落ちてやれ (All right, then, I'll go to hell)」(31 章) と決断する部分である。

一人称の語り手が、当面の問題について深く思いめぐらし、その思いめぐらす内容が詳しく語られるという点で、この二つの部分は、*Moby-Dick* の一人称の語り手 Ishmael が「白」について思いめぐらす部分 (42 章) と重なるところがある。しかも、思いめぐらす Huck の行為は、Ishmael のそれと同様、きわめて真剣なものである。この真剣さは、Trickster としての Huck のいつもの姿勢とはかなりかけ離れたものである。密告のことを思う Huck のからだは「ガタガタふるえて熱が出る (trembly and feverish)」ほどであった。手

紙を出すことの是非について思い迷った Huck のからだも、「ブルブルふるえ (shiver)」たほどである。逃亡奴隷 Jim への対応をめぐる Huck の悩みは、それほど深刻なものである。

Ishmael の「白」の分析は、つまりは「自然」の分析であった。しかしこの分析は、Ahab 船長のことばの意味を確認するという性格を持つものであった。Huck が分析するのは、自分自身の「心」の世界である。つまりは「善」「悪」をめぐる「良心」の世界である。その「良心」に対して、「うそ」をつけるかどうか、これが Huck が分析すべき問題である。しかし、Ahab の「仮面」観が、Ishmael の「自然」観を先取りして示したように、Huck の結論は、物語の中ですでに見えている。それも、Jim の示した「人間」観を通してである。

この悩みに先立ち、Huck は Jim をからかう。Jim は夢をみていたのだと「うそ」をつくことにより、Jim を困惑させるのである。Huck のその行為に対し、Jim は「友達の前にごみをかけて恥をかかせるやつはくずだ (trash is what people is dat puts dirt on de head er dey fren's en makes 'em ashamed)」

(15章) という考えを述べる。すなわち、「うそ」をつく存在としての Huck は、「人間 (people)」として「くず (trash)」であると規定するのである。この Jim の見方に対し Huck が出した結論が、以後 Jim に対しては「もういたずらはしなかった (I didn't do him no more mean tricks)」というものである。

Jim に対しては「トリック (trick)」を弄さないこと、このことは、この段階ですで確認されていたことである。この後なされる二度の思いめぐらしは、このことの再確認作業でしかない。Ahab 船長が Starbuck に対して語った「仮面」観を、傍観者としての語り手 Ishmael が「自然」を通して分析したのと同じように、Huck は、Jim によって提示された「人間」と「くず」の問題を、時間をかけて検討する。その検討結果が、「密告」をやめること、「地獄」に墮ちることもいとわないことであった。つまりは、Jim に対しては "trick" を弄さないことである。このことは、「良心」に関しては Trickster にならないことと、おそらく同義である。これが「くず」としての「人間」を避けるための唯一の道であった。

Ralph Ellison は、*Huckleberry Finn* について論じる際、Jim と Huck のこのような関係に注目する。Ellison によれば、家族への愛、友への誠実さ、自由への願望等を身につけた Jim は、「本質的な人間性 (essential humanity)」を象徴する存在である。一方 Huck は、その Jim を自由にするだけでなく、因襲化された社会的な悪から自分自身をも自由にするという点で、「人間主義

者 (humanist)」であり、「個人主義者 (individualist)」である。このような見方は、明らかに作品の「主題」や「教訓」に焦点を当てたものである。実際 Ellison の見るところでは、*Huckleberry Finn* の作者としての Mark Twain は、「きわめて道徳的な (highly moral)」な作家である。¹⁰

「主題」と「教訓」に見られるこのような特徴は、「筋書き」の問題にも関わる。作品構造の視点から *Huckleberry Finn* が論じられる際、しばしば指摘されるのは、物語の最後の部分の Jim 救出劇の不適切さである。*Huckleberry Finn* を高く評価する Hemingway でさえも、この部分に関しては、なくもがなの「全くのごまかし (just cheating)」としている。¹¹ しかし Huck が、基本的に「うそ」を日常とする Trickster 的存在であることを考えれば、「良心」をめぐる一時的自己分析の後、日常的な「うそ」の世界に戻ることは、必ずしも不自然なことではない。しかもこの段階では、Jim を「奴隷制から盗み出す (steal out of slavery)」(33 章) という「良心」に関わる行為は、再会した Tom の態度如何にかかわらず、Huck はすでに決断済みなのである。救出劇への参加は、その上でのことである。

Trilling は、この部分の構造について、Huck が「幕の背後 (background)」に身を引いて「匿名性 (anonymity)」を回復するという点で、「形式的妥当性 (formal aptness)」があると見ている。¹² このような見方に立てば、この部分の「筋書き」は、Trickster へ回帰する少年 Huck の姿を語るものに他ならない。Trickster という「うそ」と「仮面」と「欺瞞」の世界の背後に、逃亡奴隷救出という、社会的正義、個人的正義に関わる問題が、見事に隠蔽されるのである。

IV

Phelps 農場で、来るのが遅れた理由を Aunt Sally から尋ねられた Huck は、とっさの思いつきで、それを船のシリンダーの爆発という事故のせいにする。その直後、二人の間で、次のような会話が交わされる。

"Good gracious! *anybody* hurt?"

"No'm. Killed a *nigger*."

"Well, it's lucky ; because sometimes *people* do get hurt."

(Chap. 32, emphasis added)

船の事故は、例によって「うそ」である。したがって「黒んぼが一人死にました」という Huck のことばも、もちろん「うそ」である。しかし、「うそ」にはじまるこの対話は、内容的に一つの事実を伝えてくれる。「黒んぼ」(nigger)という存在が、二人の対話では、「ひと」(anybody/people)の範疇に入っていない、ということである。

19世紀ヴィクトリア朝イギリスは「偽善」の時代であったとされる。同じように、19世紀中葉のアメリカは、「詐欺師」の時代であったという見方がある。文明化の道を邁進したこの時代は、他の時代にも増して「詐欺師」が活躍した時代であったという見方である。実際、東部出身者としてのあやしげな「物売りヤンキー」(Yankee peddler)のイメージや、「ほら話」(tall tale)で人を煙に巻く Mike Fink や Davy Crocket のような中西部の伝説的人物像が形成されたのは、この時代であった。¹³ ミシシッピー川流域の「うそ」の世界を描く *Huckleberry Finn* は、Melville の *The Confidence-Man* と同様、アメリカのこのような時代状況の中に確かに位置づける作品である。

しかし *Huckleberry Finn* と *The Confidence-Man* の間には顕著な差異が存在する。*The Confidence-Man* の場合、主人公詐欺師は、「仮面劇はさらに続くであろう」ということばに象徴されるように、「仮面」の下の素顔をついぞ白日の下にさらすことがない。他方、Trickster Huck は、「仮面」の下の素顔をそのまま衆目にさらすことがある。逃亡奴隷 Jim をめぐる「良心」の部分がそれである。無限に「うそ」を反復しつつ、「うそ」でない世界もさらしてしまふ、それが Trickster としての Huck の姿である。この二重性を通して、アンチヒーロー的少年 Huck は、19世紀中葉のアメリカ中西部ミシシッピー川流域に生きる一人の文化的ヒーローとなる。

語り手 Huck によれば、“Mr. Mark Twain” が書いた物語 *Tom Sawyer* は、少しは「うそ」があるが、ほとんどは「ほんとう」であるという。このように語る語り手 Huck は、もちろん作者 Mark Twain 自身のペルソナとなる存在である。その Huck が語る「うそ」に満ちた物語 *Huckleberry Finn* は、*Tom Sawyer* との対比で言えば、さしずめ、ほとんどは「うそ」であるが、少しは「本当」である本、ということになるに相違ない。

注

1. テキストは次のものによる。Mark Twain, *The Adventures of Huckleberry Finn* (Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1948).

2. "trickster: A mischievous supernatural being much given to capricious acts of sly deception, found in the folklore of various preliterate peoples, often functioning as a culture hero, or one that symbolizes the ideal of a people....The existence of trickster figures appears to be universal. The Japanese trickster fox Kitsune is renowned for his mischievous metamorphic abilities. He is regarded in Shinto lore as the messenger who ensures that farmers pay their offerings to the rice god" (*Encyclopedia of Literature*, Merriam-Webster, 1995, pp.1130-1).

3. Andrew Lang, "The Art of Mark Twain," *Illustrated London News* (1891), rpt. in *Mark Twain's Adventures of Huckleberry Finn : Bloom's Notes* (Chelsea House Publishers, 1996), p.28.

4. Warwick Wadlington, *The Confidence Game in American Literature* (Princeton University Press, 1975), pp. 3-9.

5. *Huckleberry Finn* の時代設定は 1835-45 年頃とされる。一方、*The Confidence-Man* は、作中に 1851 年のロンドン万国博覧会への言及 (7 章) がなされていることなどから、1850 年代が背景と考えられる。Cf. Jonathan Arac, *Huckleberry Finn as Idol and Target: The Functions of Criticism in Our Time* (The University of Wisconsin Press, 1997), p. 210 : Richard D. Smith, *Melville's Science: "Devilish Tantalization of the Gods!"* (Garland Publishing, Inc., 1993), p. 224.

6. Daniel Hoffman, *Form and Fable in American Fiction* (University Press of Virginia, 1994), pp. 317-21.

7. Ernest Hemingway, *The Green Hills of Africa*, qtd. in John C. Gerber, *Mark Twain* (Twayne Publisher, 1988), p. 104; Harold Bloom, *Mark Twain* (Chelsea House Publishers, 1986), pp. 63,133,150.

8. "His [Trilling's] essay proved the book's open sesame into college canonicity" (Jonathan Arac, *Huckleberry Finn as Idol and Target*, p. 18).

9. Lionel Trilling, "Introduction," *The Adventures of Huckleberry Finn* (Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1948), pp. v-xvii.

10. Ralph Ellison, "Twentieth-Century Fiction and the Black Mask of Humanity," *Shadow and Act* (Random House, 1964), rpt. in *Mark Twain's Adventures of Huckleberry Finn: Bloom's Notes*, pp. 38-40.

11. Hemingway, *The Green Hills of Africa*, qtd. in John C. Gerber, *Mark Twain*, p. 104.

12. Trilling, "Introduction," p. xiv.

13. Karen Hallutnen, *Confidence Men and Painted Women: A Study of Middle-class Culture in America, 1830-1870* (Yale University Press, 1982), pp. xiii-xiv, 29-31.

(本稿は、岩手大学教育学部平成十年度研究生胡菁凌氏との *Huckleberry Finn* をテキストとする定期的学習に基づく。記して感謝したい。)

(岩手大学教育学部英語教育講座)